
魔法少女まどか マギカ ～IF物語～ とあるオリ主（男）によるチート物語

フェイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女まどか マギカ 〜IF物語〜 とあるオリ主（男）によるチート物語

【Nコード】

N1091S

【作者名】

フェイト

【あらすじ】

あの時、少年は死ぬはずだった——だが、一人の少女の気まぐれによってその運命は覆される。
これは偶然によって命を繋いだ少年の、原作ブレイク物語。マミータあの人とか青い剣士のあの子とか！ 死ぬ運命にある人々に今一度の救済が？

尚、この作品には（ご都合主義）、（チート）などの成分が含まれ

ています。ご注意ください。

プロローグ 運命を捻じ曲げた少女（前書き）

始めまして。フェイトと申します。

小説初投稿、しかも駄文という最悪の組み合わせですが、何とかご了承ください…。

また「あれ、ここおかしくね?」「誤字脱字見つけた」という人はガンガン指摘をお願いします。

こうしたら文章力上がるんじゃない? といったアドバイスも受け付けております。生温かい目で見守ってください。

プロローグ 運命を捻じ曲げた少女

……一人の少年が紡ぐ、あつたかもしれない、もしもの物語。

ドシャ、という音が後ろで聞こえた。

一定の質量を持つ物質が地面に落ちた際の落下音。少女は驚いて、後ろを振り返る。

……家の屋根が焼け落ちた音だった。炭化しかけた木材加工のソレはボロボロに崩れて、原型を留めていない。

(……こんなにも、脆いんだ)

内心で独りごちた。

周りには既に燃え盛る炎。直に此处が焼け野原になる事は、誰にでも理解できる。

……故に逃げ道はない。この現状は同時に、あと少しで少女の命が消えるのを示していた。

そんな中、少女はひとりでに喋りだす。

「短い人生だったなあ。まだ色々やり残した事とかあるのに。はあ……何でこんな事になっちゃったと思う？」

問いかけ。それは目の前に転がるヒトだったモノに。

見れば先程の家の屋根と違い、原型はちゃんと留めている。ただ、生命に必要な最低限の行為——呼吸をしていない。心肺停止とかそういうものを抜きにして、目の前のモノはもう死んでいるのだ。

「ご免、巻き込んだじゃって。実は私が悪いんだこれ……ちょっと火遊びしてたらこんな事になっちゃった」

ふふつ、と少女は笑う。……壊れている。この光景の中、今の少女を見れば誰もがそう呟くだろう。無論、そう判断する者は皆無だが。

……そこに、

「ねえ、君に願いはないのかい？」

そこに、少女のものでも少年のものでもない第三者の声が響き渡った。

「……ん？ うわ、ついに変なの見えてきた。もう酸欠で死ぬ前かな」

「開口一番それは酷いな……しかし、思わぬところにお宝だ。本当はそこに転がってるその子と契約するつもりだったんだけど」

「あー駄目駄目。もう死んでるよ、その子」

「知ってる。見れば分かるしね……と、それは置いて。君、僕と契約して魔法少女になつてよ」

「はあ？ いや、何その魔法少女って。もう私、人生には諦観しかしてないからね。魔法少女みたいに希望溢れるもんにはなれないんだよ。……なる気もないけど」

「……僕が何でも願いを叶えられる、と言ってもかい？」

「うん」

……一拍の間すらない、即答。

当然だ。「魔法少女」は少女にとって、日曜日の朝からやってくる非現実極まりない空想の一端。中に出てくるキャラクター達は、幸せな役割を演じているに過ぎないモノとしか捉えられない。

自分とは違う世界の住人達。幸福に満ちた、不幸とは何の縁も無さそうな人々。

——そんなモノに少女はなりたくないし、なれなかった。

「強情な子だなあ。どのみち君は、ここで行動しなきゃ死んじやうのに。そこに転がってる子みたいにな」

「あ？　じゃあいい事思いついた。その子を安全な場所につれて生き返らせてあげてよ。私は死ぬけど」

「いや、だから願いの代償として契約……ああけど、それはいい案かもしれない。彼は間違いなく逸材だ。君の願いによって生き返らせ、後で魔法小——年にしたらいいんだからね」

「いやあんたの都合とか全く知らないけど。まあそうしてあげて私の勝手、私の不注意で巻き込んだんじやったんだし。最後までいい偽善ってやつを発揮してもいいじゃん？　……じゃあね」

そう言い残し、少女は燃え盛る建築物の中に消えていった。最後、「しゃあないからくそつたれな両親と一緒に死にますか」という呟きが聞こえたのは気の所為か。

……残ったのは、謎の白い生物と少年の遺体だけである。

「……願いの承諾って形で、君を生き返らせてあげるよ。あ、それと安全な場所に連れてね。君のような逸材、この世界にはきっと居ない。覚えておいてね。君を助けたのは少女の祈りであり、運命を捻じ曲げたのも彼女だって事」

ここで、一つの物語は終わりを告げる。紛れも無く、一人の少女の。そして、始まるのは少年の物語。

本来なら在り得ない、もしものお話は、ここから動き出す。

ブログ 運命を捻じ曲げた少女（後書き）

ううん、何かGU DA GU DAになった気もしますが、所詮これが私の文章力です。

では、次からは（多分）原作キャラが出てきます。主人公も漸く喋ってくれると思いますが、上手く表現できるかどうか。
では、次もよろしく願います。

第一話 始まり（前書き）

改めて自分の作品を見直すと……ため息しか出ませんね。

と、ついに本編スタート（？）です。最近、アニメ（原作）の方を全く見てないので展開がおかしい、といった部分も多々あると思いますが。

その場合、お手数かけますがご指摘お願いします。

第一話 始まり

……朝、という単語を聞いて。おおよその人は何を思い浮かべるか？

父さんは新聞を読んでいて、弟や妹は服を汚しながらも朝食を食べ続け——母は洗い場で食器を片付けている。そんな家族の日常風景を連想する人は多いと思う。

だが。この少年にとって朝とは——地獄でしかない。

「ぬああああ！ 遅刻じゃん！」

時刻はAM8時10分きっかり。ちゅんちゅんと、小鳥のさえずりが恨めしい。そんなに鳴いてるんなら起こしてくれよと言ってやりたいレベルである。

今の時間、通学路にて友達と他愛ない会話を繰り広げる時なのだろう。少年——未来 カケルにとっては家で絶叫しまくる時間でしかないのだが。

起きるためのライフライン……自宅の寝室にて、タイマーを合わせておいた時計からは何の音も聞こえない。針が進む音さえもだ。つまり、電池切れである。

電池切れになるのはこれで3回目。1、2回目共に遅刻せずに済んだので今回も大丈夫だろう、とポジティブ思考で支度の開始。

まずは服。クローゼットの中に掛けてある学生服を乱暴に引っ張り出して着替え始めた。

「うわ、昨日アイロンかけんの忘れてた。くっしゃくしゃじゃん……」

カケルは嘆息しつつも、しわくちやのカッターシャツを中に着込む。誰かに見られる訳でもないし、いいかと納得しておいて。

「じゃあ行つて来まーす」

粗方の準備——洗濯、着替えというカテゴリを約2分というスピードで済ませたカケルは、のんびりとした声で家のカギを閉めた。当然、朝食は食べていない。加えて言えば弁当も持っていない。胃にはしばらく我慢してもらおう、と腹をくくる。

「つと、遅刻遅刻。はあ、いい天気」

今日も嫌味なまでに青い空を見上げて、ようやくカケルは通学路に踏み出す。

そんな少年の背中に、「いつてらっしゃい」という言葉がかけられる事はなかった。

- - - - -

「はっ、はっ……セーフ。凄いな俺、あの距離を走り抜けたぜ」

息せき切って階段を昇り続けた結果。教室の喧騒を見るに、遅刻では無い。カケルは胸を撫で下ろす。

後は中に入るだけ——がらり、という音を立ててドアが開いた。席に着くまでの道のり、何回か「おはよう」という声が上がったが返す気力はもうない。笑顔を適当に返しておいて、着席ー。

カケルの息も整ってきた頃、隣から声がかかった。

「おはようカケル君。ぎりぎりだね……息も上がってるし」

「おはよう、まどか。唐突だけど今日は弁当を分けてください」

「うん、いいよ。……ええ!？」

急にあたふたし始めたこの子は鹿目 まどか。ピンクの髪をツインテールに纏めている少女だ。よく弁当を分けてもらってます。

「おはようカケル。ん？ 何でまどかの顔が赤いのよ」

この青髪の子は美樹 さやか。とにかく元気、取り敢えず一途。

……まあ活発な少女だと思う。良くも悪くも。

「おはようさやか。……さあ。弁当忘れたから分けてくれって言うたらこうなった」

「あ、あう。いや、カケル君がわわわ私なんかのお弁当を？ あわわわ」

「弁当？ あーはいはい分かったわ。まどかも災難だねーこんな鈍感を」

「さささやかちゃあん」

ぼこぼこまどかに背中を叩けがらも、さやかは邪悪な笑みを崩さない。さやかがこういう顔をする時は、大体色恋沙汰が関与しているのだが……はて？

首を傾げていると、キンコーンと電子音。HR開始である。がやがやと騒がしかった喧騒が、少しずつ収まってゆく。やがて全員が席に着いた頃、先生が入ってきた。……あ、あの顔何かあったな先生。

カケルの直感スキルは見事にヒットした。否、してしまった。嫌な時しか当たらない気もするがそこはスルー。そんな事より、負のオーラーを全身に纏う先生の姿は……禍々しい。生徒にプライベートルな事を話して何が良いんですか……被害に遭うのは生徒ですよ、と心の中カケルはこちる。

「さて、このお話はここまでにして！ 今日には転校生が来ます！」

ざわっ。にわかに活気を帯び始める教室。「この時期に転校生？」「どんな子だろ」といった声飛び交う。一部の生徒が「転校生の件の方が後回しなんだ……」と呟いたが他の喧騒にまみれて消えてしまった……そう考えるのが普通です、ハイ。

「それではどうぞ」
ガラっ

「曉美 ほむらです。宜しくお願いします」

ざわっ。にわかに教室が活気に包まれる。

……この時、俺は思ってもいなかった。この少女が引き金となつて、全てが始まるなんて。

第一話 始まり（後書き）

一旦ここで…。

見てくださった方々、本当にありがとうございました。

次はついに白まんじゅうと出会うことに……？

更新は少々不定期かもしれませんが、出来得る限り早く出しますの
で、応援宜しくお願いします。

あ。それと主人公の特徴とかも書いておきますね。あとがきの方で
ちよくちよく書いていくので予定です。一旦、これだけ。

未来 カケル

年齢… 14

身長… 165cm

体重… 50kg程度

第二話 過去、そして予感（前書き）

唐突ですけど、私はリア充主人公を一時期否定してました。けど、ね。自分で書いてみると自然とこうなったの！そしてライトノベルを見てからこうなったの……はい、すいません。きっとこの症状、私は4年生の頃から発症してます。

と、前置きは終いておいて。今回は主人公の過去が語られます。黄色い人はいつ出るんだよ！というツツコミが来てもしょうがない程の構能力不足ですいません……次こそは！では、どうぞ。

第二話 過去、そして予感

未来 カケルは、7歳の頃天涯孤独の身となった。

あまりにも早すぎる死別。10にも満たない子供にとって、その傷はあまりにも深すぎて。

こっちの事情を上っ面だけ理解した振りをして、同情してくる大人。「親無し」と侮蔑して、石やら誹謗中傷の言葉を投げかけてくる奴ら。そんな奴らがたくさん居た。うざったい程に。

中には本当に心配をして声をかけて来た人も居るかもしれない。だが、傷心中のカケルにとって、そんなものは紛い物だ。何の感情もこもっていないただの音。

ある日、孤児院に暮らすカケルの元に顔も名前も知らない、遠い「親戚」と名乗る人達がやってきた。その人達は「私達と一緒に暮らさないか」「こっちに來て、新しい学校に通いましょう」とこやかに告げてくる。

カケルは「嫌です」と首を振った。自分の親は、あの温かかった両親だけ。他の人に付いて行く気はありませんと。

心底親戚は残念そうな表情を浮かべ、「また来るよ」と言い残して帰って行った。

……そこから2ヶ月が経ち。孤児院での生活も少しずつ安定してきた頃。

変な白い生物が、話しかけてきた。

いや、本当に。冗談抜きで。ついに精神でも病んだんですかあ？と言われてもしようがないと自覚している。

日に日にそいつは俺に話しかけて来るようになった。終いに「魔法少女、じゃなくて魔法少年になってよ！」と嬉々高揚とした声音で言ってくるもんだから、俺は思わす孤児院を飛び出した。逃げる

的な意味で。

……孤児院を脱出した（？）その日。俺はあの火災に巻き込まれて……。目が覚めると、白い天井に白いカーテン。鼻腔につんとくる消毒液——アルコールの匂い。

ここは病院なのだと、幼いながらに理解できた。

そして、息を呑む音。

いつの間に——そう思うより先に、俺はあの日以来いた「親戚」に抱きしめられていた。何が何だか分からなかったが、後に訊いてみると俺が抜けだした孤児院の職員から電話が掛かってきたらしい。「カケル君が居なくなつて……」とか何とかかんとか。心配してここにすつ飛んできたんだ、と苦笑しながらも話してくれた。

その話を聞いて。ああ、俺は迷惑をかけたんだと思って。

この人たちは、心の底から俺を心配してくれたんだと実感できて。

……情けない話、声を上げて泣いてしまった。

そしてあれから7年。自分は今、此处に居る。

屋上、風の吹くお昼頃にて。

三人の少年少女が、わいわいと弁当をつつつきあっていた。

三人のうち二人は少女、一人は少年という「リア充爆発しろ」シチュエーションだったが、少年にはやましい気持ちは微塵もなく、二人の少女もそれを納得した上で屋上に来ている。そこに甘ったるい空気が流れる事は皆無だった。

「うーんまどかの弁当美味しいな！ さやかのもいただきます」

「ぬお！ あんたから奪う物は無いのに、何でこっちばかりが搾取されてんのよ！」

「まあまあさやかちゃん……」

いつも通り、ピンク髪の女の子——鹿目 まどかが憤慨中の元氣少女、美樹 さやかを宥めている。そんな中、唯一の少年——未来 カケルこと俺は素知らぬ振りをしたまま空を見上げるばかりだ。

「にしてもさあ。夢で出会った子が転校してくるなんて珍しいわよねーあの転校生も、まどかの事知ってるみたいだし」
憤慨から復帰した（であろう）さやかが、まどかに話を振った。

「うん。さつきも意味深な言葉投げかけられたし……しかもその夢には続きがあつてね。ほむらちゃんが必死に戦ってる光景を、私が見てて。そんな時、白い犬みたいな子が私に話しかけてくるの。何か、君には力があるとか凌駕するゝとか。一番気になったのは魔法少女になってとか」

「……何？ そいつ、赤い目をしてなかったか？」

魔法少女、という単語が聞こえたカケルが訝しげに声音を潜めた。さつきまで空を見上げてた筈なのに……とさやかが呟く。

「う、うん。してたよ。……カケル君なんで分かったの？」

昔そいつに会った気がするんだ、とカケルが告げると「！？」という息を呑む音。そんなに驚かなくても……と思う。が、反面、当

たり前の反応かなと冷静に分析する自分が居るので不思議だ。

「……まあ7年ぐらい前の話だし。自分の思い違いだったりするかもな」

そう付け加えると、二人は「そ、そっか」と気後れしながらも頷いてくれた。これは素直にありがたい。そんな生き物を見た事あるって……と白い目で見られないか心配していたのだが、どうやら杞憂だった様である。

直後、話を終わるのを見計らっていたかの様に、キンコーンカインとチャイム。二人が弁当の片づけを始める中、俺は一人嫌な予感をひしひしと感じていた。

「……こんな時に限って直感スキルは当たるんだよなあ」

カケルの独り言は誰にも聴こえる事なく、風にのって消えていった。

第二話 過去、そして予感（後書き）

ふう、二話もなんとか終わりました。

読んでくださった方々、本当にありがとうございました。
では、また次回。

第3話　そして、白まんじゅう。（前書き）

やっとこさ第3話でございます。黄色い人が出ないよ、マスター。あ、コメントやお気に入り登録、そして感想を送って下さった皆さん、本当にありがとうございます。

嬉しすぎて舞い踊っていたら、母に「大丈夫？」と凄い目で見られました。が気にしな—い。

それでは、どうぞ。

第3話　そして、白まんじゅう。

夕暮れの帰り道、というよりCDショップにて。

「……何で俺が買わなくちゃなんないんだよお」

「うつさい。あんた昼休みの時に食べた弁当の量を言ってみなさいよ？　CD一枚分で済むのをありがたく思いなさい。おかげで午後の授業は腹の虫が収まらなかったわー」

「はは……ご免ねカケル君」

最近のCDは高いですねー子供の財布の中はどうなってるんでしょ！　等と年寄り臭い事を言いながら、カケルは2枚のCDを手にし、レジへ向かう。

どちらも自分のモノではない。最終的には後ろに控える二人のものとなる。まあ少々違うが。

一人は「当然よ」とふんぞり返っているし、もう一人は謝りながらもちゃっかり買ってもらうのだから抜け目がない。

（……いやまあ俺が悪いんだけどさ）

どうしてこうなったかと言うと、責任の発端はカケルにある。昼休み、屋上にて「弁当を分けて下さいお願いします」と懇願したところ、まあ少しだけなら……と渋々ながらも彼女達は承諾してくれた。調子に乗った（乗りすぎた）カケルが玉子焼きやらウィンナーやらをつまんだ所……悲しきかなとなりました。

まあ、中学生女子の食べる弁当の量だ。たがが知っている。あんなんで足りるのか、とカケルは疑問に思うが、その少ない弁当の中身を食べたのは誰だっけ、と考えると……ふう。

「合わせて2897円です」

「……はい」

とつても、そうとつても素晴らしい笑顔でCDの合計金額を告げるレジのお姉さん。財布からたった一枚しかない5000円札を取り出し、おつりを貰う。ああ愛しの樋口さん、と嘆くが既に遅い。リターンされたものは野口さん2枚と100円玉と……もう数えるのをやめた。

「おっつかれさん。いやあよく働いてくれたな愚民よ」

「誰が愚民だ愚民！　　ったく、またさやかは上條の見舞い品か。羨ましいねえ、ほい」

「なっ！　　そ、そうだけど……」

「まどかはこっちね。はあ、樋口さん……」

「？　　あっ成る程……うん、ありがと、カケル君」

カケルがCDを二人に手渡す。反応は対照的で、さやかは顔を真っ赤にぶつくさと、まどかは何故か嬉しそうにはにかんでいる。

「じゃあさやかは置いて帰りましょうか」

「うん、そうだね」

「いやけど私と恭介はそんなんじゃない……って待ていそこの二人！　　私を置いて帰るな……！！」

さやかが店内だという事も忘れて絶叫。こらこらさやかさん。あんまり騒がしいと白い目で見られるよ？ 色んな人に。

カケルが心の中で忠告した頃、丁度近くに居た店員さん（男）に「お客様、店内では静かに」と少々ドスの利いた声が、さやかに掛けられていた。南無。

カケルを見つめる視線に「覚えてなさいよ」という恨めしげな何かが垣間見えたのは気のせいだろう。そのままさやかは肩を落としてながらこちらへやって来た。

「カケル」

「！あの目はやばい……今度こそ逃げるぞ、まどか！」

「に、逃げるの？……ご免ねさやかちゃん……え？」

「？ どうした、まどか？」

「まどか？ 大丈夫？」

不意に、走り出そうとしたまどかの足が止まる。殺気立っていたさやかもそれに気付いた様で、まどかの肩に手を置いたその時――

< たす、けて…… >

「「っ！」」

カケルの驚愕と、まどかのソレが重なった。

頭に直接響くような、それこそテレパシーを髣髴とさせる声。し

かも、この声音はあの時と同じ……！
横目にまどかを覗くと、まどかもこちらを見ていた。交錯する視線。

「……カケル君も声が聴こえるの？」

「ああ。しつかしまどかもとはね」

「は？ いや、ちよっ」

「場所は分かるか？」

「うん、大体……しかもこの声、夢で見たのと同じ」

「いやだから何の話——」

「ならその場所まで案内してくれ。俺も付いて行く」

「分かった！ こっちだよ」

まどかはそのまま、CDショップからもの凄い勢いで出て行った。カケルも付いて行こうとしたが、制服の裾を引っ張られそれも叶わない。

「待ちなさいよ………どういう事？ 声って、何？」

真剣な眼差しで、さやかはカケルを見つめている。こういう時に適当な返事をして仕方がないので、カケルは単刀直入に言い放った。

「……これから俺達は、昼休みに話してた変な生物を捜しに行く」

「その声だって何で分かるの？」

「俺が昔、そいつに会ったかもしれないって言ったよな？ 今聴こえた声は、その時の声とそっくりなんだよ。姿形だって覚えてる……！ 完全に一致した。記憶の中のアイツだって」

「……そっか」

そう言っつて、さやかは裾をはなす。カケルは一言「ごめん」と謝っつて、まどかの後を追いかける。

しばしの間——といっても1、2秒、さやかは俯いていた。が、直ぐに顔をあげてぱんつ、と自らを鼓舞するように頬を叩いた後。

先程カケルに向けたものより真っ直ぐな目をして、こう言った。

「よし！ 行きますか」

いつの間にか人波は消え失せ、代わりに静寂が周りを支配する空間。

そこに、一人の少年が駆け込んでいく。

（……さやかには申し訳ないことをした）

走りながらカケルは後悔するも、後の祭りだった。

いや、実質あの場で声が聴こえていたのはまどかとカケルの二人だけ。さやかは様子を見るに、聴こえているような感じはしなかったし、付いて来るかどうかは結局、本人の意思だ。カケルが自分を責めるのはお門違いなのだが……。

（けど、あいつ一人置いてくるって……訊くぐらいすりゃ良かった、来るか？ って……）

「……あ」

負の連鎖に沈みかけていたカケルが、呆然と声を上げる。

50 m 先、目的の人物の背中が見えたからだ。

「まどか！」

薄暗い照明でしか照らされていない倉庫の様な場所に、まどかが入っていく。流石にこれ以上距離を開かれては堪らないと言わんばかりに、カケルは声を張り上げた。

「えっ？ カケル君……良かったあ」

声が聞こえたのか、足音で気付いたかは分からない。まあ、まどかがこちらを漸く振り向いてくれたので、それはどっちでもいいが（それにしても）

「まどか、ここから声がするの？」

「うん……間違いない、ここだよ」

ふうん、と追いついたカケルは、まどかが指差す方を見る。その

先にはでかかと「改装中」「関係者以外立入禁止」とかかれた看板。

最後に「♪」マークでも付いていれば、まだ可愛げがあったものの……内心でごちるがまあどうでもいい。

ギイ、という音を立てて、トビラが開かれる。中は殆ど真っ暗だった。改装中？　ここ倉庫じゃないの？　というくらいには。唯一足元で反射する緑色の輝きを見るに、ここは非常口なのだろう。上を見れば映画館で見慣れた少年（ですよ）がポーズをとっている。

あーけどこんな所に来るの初めてだなーとかアレって工事用のセメント袋じゃんとかポールじゃんとか……カケルは微妙にテンションが上がっている。いや、最初の以外でテンションが上がるってどーよ？　と一人ボケツツコミをかましていると、まどかが「ど、どこ？　どこに居るの？」と搜索を始めた。

け、決して忘れてた訳ではないです、ハイ。

「……よつと」

搜索ついでに、そこら辺に転がっていた手ごろな鉄柱を手に取る。まあ、万が一を考えての護身用。流石に徒手空拳では、何かあった時にまどかを守れない。

そう覚悟した次の瞬間。

何の前触れもなしに、それは落ちてきた。

第3話 そして、白まんじゅう。(後書き)

うあああ黄色い人おお。

すいません。次こそは！ 次こそは！

第4話 魔女の結界にて（前書き）

今回こそ、マミさん出ます。長々と「次こそは」とか言ってますいませんでした！

いやまあ本当にちょっとしかでないけど、とりあえず出ます。名前すら本文では出ませんが……。

あ、少々10話のネタバレやらそんなものもありますので、ご注意を。タグに「ネタバレ注意」を加えておこうと思います（予定）。

内容は…いつもより長めです。

では、どうぞ。

第4話 魔女の結界にて

ドンガラガッシャン

何て擬音が聞こえてきそうな物騒すぎる今日のこの頃。

いや、少なくともそんなにも凄まじい音はカケルの耳には入ってこなかったが――

どしゃり。

――……目の前に何かが落ちてきたのは事実である。

「っ……大丈夫？」

まどかは突如、天井から落ちてきた物体に駆け寄る。カケルは何もせず、落ちてきた物、その白い生物をじっと見つめるばかりだ。

(……やっぱり、コイツ……)

見れば見るほど、孤児院に居る時話しかけてきた、あのヘンテコ生物だというのが鮮明に思い出される。

その声音から小柄な体躯にいたるまで、全てが同じだ。

唯一異なるのは、遠目からでも見て取れる程の傷を負っている事だけ。

白い生物はぐったりしたまま、弱々しく声を上げた。

< たすけて…… >

「あなたなの？ 私達を呼んだのは」

息も絶え絶え。このままでは遅かれ早かれ絶命してしまうだろう。

出血した部分からはじわりと血が滲んでいる。傷の形からしてソレ
は――。

そこでカケルは気付いた。

この傷は、転んだり殴られたりして出来るような傷ではない。
はつきりと、銃創らしきものが刻まれている。
つまり、この生物は追われる者であり。

……この生物を追いかけている者が居るというのを的確に表して
いた。

カケルがその考えに至った直後、足音が響く。

「まどか、下がって」

自然に、一人＋一匹（？）を庇う体勢に入るカケル。

こつ、こつと。足音は次第に大きくなっていく。
そして。

「なつ……ほむらちゃん？」

姿を見せたのは、誰でもない、転校生の暁美 ほむらだった。
こちらの姿を捉えるや、キツと目を細める。

その瞳は学校で見せていたものと違う。憎悪の念や敵意……そして
殺意といったものが含まれていた。

「あ、貴方がやったの？」

「……そうよ。けど「お前っ……何でこんなとこに居るんだよ！それに……」

転校生の肯定を遮って、それに、言葉を止める。その格好はどうしたんだとかココは関係者以外を立ち入る場所じゃありませんよーとか色々あるが、どれも違う。カケルが一番言いたいのは……！

「何でこんな事するんだよ……！」

まどかの抱えてる奴は、確かにカケルの知るヘンテコ生物だったけど、傷つける理由はない。無いはずだ。それを、何故――？

「貴方達には関係ない。理由なんて人それぞれ違うでしょう。立場、そして異なる環境下において一つの意味に縛られる意味はないのだから」

「なっ……」

「そいつを放して。さもないと……」

こつこつこつこつ。更に一歩ずつ、早足で距離を縮める転校生。

（くそっ……こいつは人間なのかよ！？ この殺気……）

別段暑い訳でもないのに、頬を汗――ではなく冷や汗が伝う。カケルは動けなかった。

武道なんて習った事もなければ、人から向けられる感情にさえ鈍感なカケル。そんな一中学生が、転校生から放たれるおぞましい感覚……殺気を感じ取れる。それ程までにソレは強い。

例えその殺気が、自分ではなく後ろの生物に向けられていたとしても、だ。

流石にヤバイ、まどかだけでも特攻覚悟で逃がすべきだ——そんな策を考え始めたその時。

ぶしゅーという音が聞こえて、白い煙が視界を覆った。

「なっ……」

一度も表情を崩さなかった転校生が、驚愕で息を呑む。

「まどか！ カケル！ こっち！」

「さやかちゃん！」

「助かったぜ。けど、どうして……」

「あゝ今は逃げるのに専念して！ 説明してる時間ない！」

慌ててまどかはキュウベえを抱え、元来た道を駆けていく。

カケルもまともに動かない足を叱咤し、もつれさせながらも立ち上がった。

「それでも食らっとけえ！」

妙に雑魚みたいな言葉を吐きながら、さやかは消火器を放り投げた。ガコン！ という硬質な音が響いたので、転校生には命中没有しない様だ。この状況では幸いと言つべきか不幸と言つべきか。

何はともあれ、三人＋一匹（？）は命からがらその場を脱出した。

「……こんなもの」

ほむらが手を掲げると、何処からか強風が吹き、一瞬にして視界が開けた。が、既に目的のアイツは姿を消している。

今頃、非常口に向けて、あの3人と共に走っている筈だ。そう考えると、ほむらは無性に頭を抱えなくなった。

（迂闊だった。まさかキュウベえがまどかにテレパシーを送るなんて）

予想出来なかった訳では無い。ただキュウベえを追いつめるのに熱くなり過ぎていたのだ。こんな時にこそ、常に一手先の事を考えつつ行動しなければならぬのに。

「けど……カケルといったかしら。何故彼はここに？」

キュウベえの事も有るが、今一番ほむらの頭に引つ掛かっていたのはあの少年、カケルの事だった。美樹 さやかは嫌でもいずれ、こちら側に踏み出すのが分かっている。特には気にしていない。

だが、彼は別だ。ほむらは幾度も時間をループしているが、彼がこちら側に来る事はただの一回も無い。ならば、何故この場所に？

……問題は山積みね、と嘆息する。

（まだ居るかもしれない。今からなら追いつくハズ）

取り敢えず希望的観測をして、ほむらが走り出そうとした刹那。

空間がぐにやりと歪んだ。

「なっ……」

ほむらはこの現象を知っている。これは……。

「魔女の結界……！」

「何よあいつ！ 今度はコスプレで通り魔かよ！ つか何ソレ？
ぬいぐるみ、じゃないよね？ 生き物？」

「生物です。あ、刺身的な？」

「だーっ！ 漢字は合ってるのに読み方が致命的におかしい！！
もうアンタはその手に持つてる鉄柱で自分の頭でも殴打してなさいよー！」

「ゴメンナサイ、シリアスな雰囲気が一瞬で吹っ飛びました」

「か、カケル君！ 流石に不謹慎だよ！ うっ……」

まどかはもう涙腺崩壊の一手前だった。この白い生物の事、そして転校生の事。色々ありすぎてもうパニック寸前なんだろう。カケルも表面上は平静を保っているが、まどかと同じく頭の中はごちゃごちゃ。ふざけた事を抜かしたのも、今の自分を精一杯保とうとした結果なのだ。その所為でさやかから「死ねえ！」と同等の発言を言われたのだが。

「あ！ 非常口！」

さやかがやつと見えてきた、救いの出口を指差す。外に出れば転校生も何も出来まい。というか、人の往来が激しいところで、あのコスプレ染みた格好のまま話かけて来る訳が無い。羞恥心的な意味でも。

「やつと……」

出れる、と思いきや。

空間が、その名の通り裂け、歪む。

「えええええ！？」

あまりにもイレギュラーな事態に、さやかとカケルが叫んだ。だがまどかは「これって……」と呟いただけで、カケル達ほど困惑していない。

空間の歪みは更に激しくなる一方だ。元々あつた非常口の通路はもう消え、代わりに明らかになっていくのは壊れた世界の輪郭。まだ臆気だが、この世のものでは無いという直感が、カケルの脳裏を駆け巡る。

この世界は、例えるなら一貫性を持たない落書きだ。

ここに、一つの意味、そして定義を説ける者など誰一人としていないだろう。

ゴーストタウンを思わせる雰囲気だが、よく見ればそれは違う。古ぼけた信号機、木馬の形を象った看板。枯れ果てた木から、不気味に漂う動く目まで。本来有るべきものが無く、余計な何かがその分混じっている。

真っ白いキャンバスに色んな絵の具をぶっつけた様な、統一と言
う言葉が欠落した感じ。色んな物を混ぜすぎて、最終的には何をデ
ーマにしたかを忘れてしまった、そんな世界。

「っ……何か居る！」

果たしてそう叫んだのは誰だったか。

同時に、蠢くモノが一斉に飛び出した。

（囲まれた……）

いつの間にか、生物らしきモノはカケル達を囲んでいた。数はざ
っと見ても20近い。

逃げようなんて考えるな、お前達は逃がさない……そう言わんば
かりに集まってくる。

「まどか、さやか。絶対に離れんなよ……！」

「カケル、あんた……！」

「そんな、無茶だよ！」

……武器を持っているのはカケルだけだ。が、大した武力もなけ
れば、この鉄柱を達人の様に扱える訳でもない。

今でも、膝がガクガクと震え、この某ポテトチップスロゴキャラ
クター似のこいつらに屈しそうになる。けど。

「退けないんだ……絶対に！ もう、誰かが目の前で死ぬのは嫌
なんだよ！」

カケルの鉄柱を握る手に、自然と力が籠る。
そして……。

ぱちぱちと、この場に似つかわしくない拍手の音が響いた。

第4話 魔女の結界にて（後書き）

前回と同じ終わり方ですいません…。

一旦ここで終わり。直ぐに次話を投稿しますので少々お待ち下さい…。

第5話 魔法少女マミ、参上！（前書き）

今回からやつとマミさんがレギュラー化です。作者としても喜ばしいのですが、今だに口調がよく分からない…マミさんはこんな口調じゃ無い！ という人はご指摘お願いします。

あと今回はかなり短い！ 内容もさらっと打ったものなのでおかしい部分が多々有ると思いますが。

それでは、どうぞ。

第5話 魔法少女マミ、参上！

「お疲れ様。中々にカッコ良いわよその台詞」

ぱちぱちと、この場に似つかわしくない拍手の音が響いた。

今、この状況——敵に四方八方を囲まれた状態だというのに、カケル達は反射的に後ろを振り返る。

そこには、まどか達と同じ、見滝原中学の制服を着た女の子が立っていた。手には黄色い光を発する、宝石の様なものが収まっている。

彼女はそのまま、優雅な足取りでこちらへ近づいて……まどかが抱えている白い生物を見やった。

「キュウベえを助けてくれたのね。ありがとう。その子は私の大切な友達なの」

そう言つと、カケル達に向かってにつこりと微笑んだ。

「あつ……あの、私達、呼ばれたんです。頭の中に直接この……きゅ、キュウベえ？ の声がして」

「へえ、成る程ね……」

先の笑顔とはうって変わって、さやかとまどかを観察する様に目を細める。何か俺、忘れられてるなあ、とカケルは思ったが口には出さないし顔にも出さない。

……ふう。

「その制服、貴方達も見滝原の生徒みたいね。二年生？ 名前は？」

「えつと……貴方は？」

さやかが怪訝そうに質問を質問で返すが、彼女は特に害した様子を見せない。

「そうね。名前を訊く時はこっちから自己紹介するべきよね」

一呼吸の間を置いて、くすり、と申し訳無さそうに彼女は苦笑。自らの非を認めたその態度に、寧ろこちらが謝りたくなる。

そのまま体を一回転。とんとん、と軽やかなステップを踏み――

「でもその前に、一仕事片付けちゃっていいかしら！」

瞬間、彼女の……いや正確には宝石らしきモノから眩い七色の光が発せられる。その後、すぐさま荒れ狂う暴風が発生した。カケル達は身を守る様に腕を交差させ、謎の光と風を発生させた彼女を見る――だがその場に彼女はもう居なかった。

「何処に行ったんだ？」

「あ、あれ！」

「え？」

まどかが上を向いたまま驚きの声を上げる。つられてそちらを向くと。

（嘘だ……）

この時、三人は同じ言葉、同じ思いを頭に浮かべただろう。それはそうだ。だって彼女は、

見上げなければならぬ様な高さに、その身を躍らせていたのだから。

人間では有り得ない跳躍力。彼女もまた、只者ではないのだと今更ながらに息を呑む。

「はっ！」

次の瞬間には、周りに大量の銃。呪文を唱えた訳でもなく、どこかの人がみたいに服から取り出した訳でもない。ただ彼女が右腕を勢い良く振りかざしただけで、当然の様に銃がその場に在ったのだ。それからもう蹂躪していくだけ。

先程まで優位に立っていた、謎の生物達。カケル達だけならば、ものの数秒で八つ裂きになっていただろう。

それが、たった一人の登場で、秒刻みで数を減らしていく。もしかすると自分は今夢を見ていて。眼前で起こるこの光景は、全てが幻だと言われても——カケルは納得してしまうだろう。

「凄え……」

圧倒的にして優雅。こうとしか例えられない。

最後の一匹が消え去った直後、おどろおどろしかった世界が消え、カケル達は非常口手前に戻っていた。

「戻った……！」

カケル達は安堵のため息をつく。そして、互いに顔を見合わせ小さく笑った。一時はどうなるかと冷や冷やしたが、こうして生きて

いるという事実が何よりも喜ばしい。

だが、そんな所にこつこつと足音。そして止む。

「……」

……カケル達との距離7mという場所に曉美 ほむらが立っていた。相変わらずの無表情だが、顔に安堵の色があるのは気のせいかな。気のせいだよな。

「魔女は逃げたわ。仕留めたいなら直ぐに追いかけてなさい。今回は貴方に譲ってあげる」

「私があるのは」

「飲み込みが悪いのね。見逃してあげるって言ってるの」

……カケルの背中に冷たいものが当たる感覚。敵意の籠った声を、彼女が見せるのは初めてだったからだ。

怒ったら怖いんだろうなあ……と、先程の声音から勝手に判断。

「お互い、余計なトラブルとは無縁でいたいと思わない？」

カケルが思うにそれは、言わずとも「帰れ」という意味を暗に示す言葉だった。

つまり、ここでもむらが提案を受け入れず抵抗すれば……発言した様に「トラブル」やらが起ころのだらう。考えたくもない。

「……」

張り詰めた空気が辺りに広がる。いやに長い沈黙が3秒ほど続き。

「っ……」

躊躇う様子を見せながらも、ほむらは背を向け去っていった。

——最後まで、まどかの方を見据えながら。

きいん、という綺麗な音を奏でて、淡い光が辺りを照らす。

彼女曰く、回復魔法だそうだ。「魔法」という単語を聞いてもいまいちピンと来なかったが、あの不気味な生物や華麗な戦闘を見た後なので驚きはしない。

しばらくして、「う……」という呻きと共に、キュウベえが目覚めました

「ありがとうマミ！ 助かったよ」

「お礼はこの子達に。私は通りかかったただけだから」

「ありがとう！ 僕の名前はキュウベえ」

マミさん（らしい）に体を向けていたキュウベえが、今度はこっちに体を向ける。

ひくひくと隣のさやかが頬を引きつらせているがスルー。こういうのは気にしたら負けだ。

「あなたが私達を呼んだの？」

「そうだよ。鹿目 まどか、未来 カケル。それに美樹 さやか」

「な、何であたし達の名前を？」

「僕、君達にお願いがあつて来たんだ」

（あー読めた。読めたよこの後の発言。昔散々言われたあの言葉に違いないな）

予想をつけたカケルはキュウベえの発言を待つ。言つた瞬間殴らない自信が……無い。

「僕と契約して、魔法少女になつて欲しいんだ！」

満面の笑みで、白まんじゅ……じゃなくてキュウベえは言う。

……危ない危ない。殴りかかるところだった。

第5話 魔法少女マミ、参上！（後書き）

最後かなりぐだぐだです。すいません。

見てくださった方々ありがとうございます。御座いました。次回、会えたら会いましょう（遠い目）

第6話 魔法少女とその事情（前書き）

更新遅れまくり（泣）のわりに短い…！ 更に駄文（笑）

大体の台詞は漫画アニメから抜粋。一部消えてますが、後半とか殆ど台詞ですw ソウルジェムの説明フィーバーなので流し読みして下さい。

次を早めに投稿しますのでお許しを。

それでは、どうぞ。

第6話 魔法少女とその事情

……俺、今日女の子の部屋に行くんだ。

無論、女友達とだけだね。

勝手に死亡フラグを立て勝手に折るという妙な思考を抱きながら、カケル達とはある場所に向かっていた。正確には、四人＋一匹。一匹というのは勿論あいつだ、キュウベえだ。数え方がよく分からないので適当に数えているが、これで良いだろう。

とあるマンションの一角、その夕暮れ時。

今現在四人＋一匹の先頭の人物——巴 マミをカケルは盗み見る。見滝原中学校3年生で、カケル達より一つ年上。そんな自己紹介の後、自らがキュウベえと契約した「魔法少女」だという事も明かしてくれた。

先程の化け物、そしてあの世界は何なのか……カケル達が寄つてたかつて彼女に質問すると、「こんな場所じゃなんだから、私の部屋でお話しない？」と笑顔で返答。

そして、今に至る。

「そういえば、魔法少女って云う割には男のカケルにもキュウベえの声が聴こえてたよね？ 何でなの？」

「？ そうなのかい？」

さやか疑問に、キュウベえが興味深々な様子でこちらを向く……つまり、意図してカケルにテレパシー（？）を送ったのではなく、

偶然に届いてしまったと云うことなのか。

カケルが相槌を打つと、キュウベえは考えるかの様に口を閉ざしてしまった。……口？

それきり会話が途切れてしまい、再び歩くこと3分。人気の無さそうなマンシヨンの通路を抜けると、不意にマミさんが立ち止まる。どうやら、着いた様だ。

「私、一人暮らしだから遠慮しないで……ろくにおもてなしの準備もないんだけどね？」

そう声を掛けてから、がちゃりとドアを開く音。マミさんはそのまま入っていく。それに続いてカケル達も「お邪魔します」と頭を下げてから中へ。

「はあ……」

「素敵なお部屋……」

まず、目に飛び込んできたのは広い間取りの部屋。申し訳程度に設置された家具は女の子のそれで、カケルはよく分からないが中々の物なのかな、と適当に思う。まどかとさやかが部屋を見て呆けた声を出す、カケルは何処か別のことを考えていた。

(……一人暮らしなのか。どうりで……)

——部屋の雰囲気そもが、自分の家と酷似しているコト。

家具の種類や、構造等からでは無い。ただ周りに漂う空気感が、淋しげな何かを醸し出している。

一般的な家庭には有り得ない、温かさが寂れた空気。同じ環境に置かれた者でしか理解出来ない、何かが欠如した感じ。

(……もしかするとただの錯覚かもしれないけどなあ)
そう納得して、カケルは意識を戻す事にした。

「あ、美味しいですねコレ!」

「マミさんすつごく美味しいです!」

「うんうんメチャウマっすよ!」

おもてなしの為に出されたケーキを、かちやかちやと音を立てて食べる三人。その減りの早さといったら、「もう少し寝ていたいけど目覚ましの音が五月蠅い」を止める際の反応速度を上回る……自分で考えておいてなんだけど意味が分からないよ。

まあ、もの凄いペースで食べているのはさやかだけで、カケルとまどかは大人しめに口に運んでいる。さやかの様子を見たマミさんは、嬉しいのか困ったのか判断出来ない曖昧な表情を浮かべた。

「ありがとう。……貴方達もキュウベえに選ばれた以上、他人事じゃないものね。ある程度の説明は必要かと思って」

「うんうん、何でも訊いてくれてまえ」

「さやかちゃんそれ逆……」

ケーキを既に食べ終えたさやかは、腕を組んで頷く。いつ食い終わったんだ、という疑問が出てくるが、つつこんだら負けなのかな。

「ふふ……じゃあ説明するわね」

そう言うと、マミさんは手のひら大の物を取り出した。カケル達が窮地に陥った時、彼女が使用したあの光り輝く宝石だ。

「これがソウルジェム。キュウベえによって選ばれた女の子が契約によって生み出す宝石よ。魔力の源であり、魔法少女である事の証でもあるの」

「？ 契約って？」

「僕は君達の願い事を何でも一つ叶えてあげる。何だってかまわない。どんな奇跡だって起こしてあげられるよ」

「金銀財宝、不老不死、更には……きゃーっ！」

「変態みたいな想像してるんじゃないだろうな」

「！？」

「凶星なんだね、さやかちゃん……」

もう駄目だこいつ、早く何とかしないと。口の中でカケルが呟くが、反応が無いのを見るに誰にも聴こえてない様だ。……無視じゃないよね？

「……続けていいかい？ けど、それと引き換えに出来上がるのがソウルジェム。これを手にした者は魔女と戦う使命を与えられるんだ」

「魔女？ さっきの化け物みたいな奴の事か？」

「ご名答。魔法少女が願いから生まれた存在なら、魔女は呪いから生まれた存在なんだ。前者が希望を与える様に、後者の魔女は絶望を撒き散らす。しかも普通の人間には視えないから性質が悪い」

「世間でよくある理由のはっきりしない自殺や殺人事件はかなりの確立で魔女が原因なの」

「そんなヤバイ奴らが居るのに何で誰も気付かないの？」

「魔女は常に結界の奥に隠れ潜んでいるから、決して人前には姿を現さないよ。さっき迷い込んだ迷路のような場所がそう。だから、基本的には使い魔と呼ばれる下っ端が暗躍してる。君達を襲ったのも使い魔だよ」

「結構危ないところだったのよ？ アレに巻き込まれた人間は生きて帰れないから」

「……つまり、一般人が仮に魔女を目撃しても、そのままそこで死ぬという事だ。目撃者が居ないのだから、警察や探偵も真相を突き止められるハズが無く。」

「そう思うと、本当にカケル達は幸運だったのだろう。事実、マミさんが助けに来なければ……カケル達は今ここに居ない。」

「ま、マミさんはそんな怖いモノと戦ってるんですか？」

震える声で、まどかが言う。

「そう、命懸けよ。だから貴方達も慎重に選んだ方がいいわ。確かに貴方達にはどんな願いでも叶えられるチャンスがある。でもそれは死と隣合わせなの」

「っ……」

今度こそ、カケル達は息を呑む。一つの願いを叶えれば、同時にその人物は非日常の世界に踏み入る事になる。その願いが何であれ、リスクが大きすぎるのだ――。

……誰も、発言出来なかった。その重さも、代償も。考えれば使い魔に襲われた時点で分かっていたのに。あんな化け物に立ち向かっていかなければならない、残酷な真実を。

「ご免なさい、怖がらせちゃつて。そこで提案なんだけど……三人とも、私の魔女退治に付き合ってみない？ 魔女との戦いがどういうものか、その目で確かめてみればいいと思うわ。その上で危険を冒してまで叶えたい願いがあるのかどうかじっくり考えてみるべきだと思うの」

取り敢えずその提案に、全員が頷くしかなかった。日々の平和を犠牲にしてまで、叶えたい願い。

それが果たして自分にあるのか……答えは直ぐに出てこなかったとしても。

第6話 魔法少女とその事情（後書き）

ふう…もう駄目だ、氣力が持たない…。

次の投稿は、昨日できなかった分早めにしようと思います。こんな駄文に付きあってくれて、本当にありがとうございます。

では、また次回。

第7話 敵か味方か（前書き）

今回はオリ主の家付近のことについて語られます！ あっちよつと待ってブラウザの戻るボタン押さないで！

冗談です、普通に会話してます。一応オリジナル展開です。そして短いですね。

それでは、どうぞ。

第7話 敵か味方か

……消えかけの街灯だけが、一人寂しげに歩く少年を照らしている。

時刻は既に、辺りが真っ暗になる頃。実際は午後八時か九時なのだろうが、カケルは携帯の表示画面で、それを確かめる気すら起きなかった。

いつもならもっと早く帰路に着く筈が——マミさんの部屋で明日の予定（魔女退治見学ツアー）について話し合った結果、そのままもつれ込んで雑談タイムに突入。

談笑した後、いざ外に出てみると、会社帰りのサラリーマンが家に入るのが見えた……つまり夜になっていたのだ。まどかとさやかを家まで送った時には、車の通日も殆ど無い、閑散な道のりを歩く事になってしまった。

まあ、此処は都市部と云うよりも田舎に近い為というのも理由に含まれるのだが。

……そんなこんなで考えていると、家の付近、約三百m前の踏み切りに辿り着いた。

カーンカーンカーンカーン……

嫌でも耳に残る甲高い音が響く。ただボーっと立っただけでも暇なので、カケルは何気なく反対側の道に視線を向けて事にした。

——と、そこに。

黒髪の少女が佇んでいるのに気付いた。

「…………え？」

次の瞬間、心臓が跳ねる様な錯覚にカケルは襲われる。

別段、そこに誰かが居るという事実に驚きは無い。何分、灯りという灯りが無い道だ。いつの間にか少女がそこに立っていてもおかしくはないだろう。

ただ、その人物が夕方襲って来た者だとしたら――？

ゴウッ。電車が前を過ぎ去り、風圧がカケルの髪を撫でてゆく。向こう側の道には変わらず彼女がそこに。

カケルは無意識に、その名前を呟いた。

「曉美 ほむら……」

ガコン。

たまたま家の近くにあった自動販売機で、カケルは無難そうなコーヒ―を二本買う事にした。銘柄は……まあ一般的。先ずは一本目を片手に持ち、もう一本を購入。ポチっとな。

再びガコン、という音を立て二本目が……という所で後ろから声が掛かった。

「お構いなく。引き止めているのは私の方なのだし」

「別にいいじゃんか。こっちが勝手にしてる厚意……というかもう二本買っちゃった。微糖かブラックどっちがいい？」

「……ブラックで」

「ほいよ」

ぽいつ、とコーヒー缶を投げる。缶は空中で見事な弧を描き、ほむらの手にスッポリと納まった。

それを尻目にカケルはプルタブをこじ開け、コーヒーを口に運ぶ。ほむらも習う様に、「いただきます」と言って一口分仰いだ。

「で？　話って何なんだ？」

流石に、一緒にお茶でもしようという訳ではないだろう。と
いうか理由が無い。絶対的にない。

カケルが相手の出方を待っていると、ほむらは唐突に口を開いた。

「貴方は何者？」

「……未来　カケル、としか言いようがないんだが」

「ならもう一つ。貴方はキュウベえがを信用するに足りる奴だと思っ？」

「……それについては、何とも。ノーコメントだな」

直ぐには「イエス」「ノー」と返せなかった。数瞬程の間を空けて、ようやく答えを出す。カケル自身、よく分かっていないのだ。それで信用に足るかと言われても曖昧な物しか出てこないに決まっているのに。

胸の奥につつかえる様な、取れそうで取れない違和感。小骨が詰まった感じと言えば分かりやすいだろうか？　それがカケルの中に渦巻いている。

「……そう。なら、忠告しておくわ。アイツの言葉に騙されないで……そして鹿目 まどかをその手から絶対に守り抜いてあげて」

「は？ まどかつて……お、おい！」

言うだけ言っで、その身を翻していくほむら。その後ろ姿には有無を言わさぬ”何か”があつて、カケルは黙って見ている事しか出来なかった。

「はあ……一体全体何だっというんだよ」

ほむらが去ったその場で、肩を竦めながら嘆息する。

分かった事と言えば、あいつはまどかを気にかけていて、キュウベえと契約させたく無いという事だけ。

（キュウベえは、確か報酬……グリーンフシードの取り合いになる云々で、まどかを契約させたくない、とか言ってたよな？ けど、違っ……あいつは守ってくれて言ってきた）

「……あゝもう分かんねえなあ」

残ったコーヒを一気に仰いで、カケルもその場を後にした。

第7話 敵か味方か（後書き）

閑話休題、そんなお話です。

カケルとほむらを、一旦会わせてみました。このシチュエーションが書きたかった訳ではなく、ちゃんと意味（？）があるのでご安心下さい（何をだ）。

それでは、また次回。

第8話 日常すぎて怖い（前書き）

すいません、更新が遅れがちですね…。
休日に入ったらなるべく投稿するぞ！ と思っているのでこの分は
必ず埋めます。

今回はギャグです。本当にギャグです。

10000PV突破！ 見て下さった全ての人に感謝を！

——少年は何を思い、そして何を振り切ってその先に行くのか。
その答えが正しいのかなんて誰にも分からない。誰でもない、自分
自身が決めていく事なのだから…。
そんな長い前書きでした。

では、どうぞ。

第8話 日常すぎて怖い

……自分にとって、切なる願いとは何だろう。

ふと瞼を閉じて考えてみる。

……分からない。

幼稚な理想も、利己的なモノでさえも。

邪な理由も、道徳的に考えれば「悪」という考えすらも。

思い浮かんでは消えて行く。

まるで自分の願いはそうじゃないとも言いたげに。

……ワカラナイ。

何が正しくて何が間違っていて何が自分の為になるのか。

何が代償となって何が失われるのかを考えると、答えは一つ。

結局自分には、身の危険を冒してまで叶えたい願いが無い。

世界中の人が幸せになれます様に？

悪が消えて正義だけが在る世界にして下さい？

こんな出鱈目でも不可能じゃ無いのだろう。奇跡とはそういう物。矛盾を是とし、当たり前を否とする事が出来る。

それでも、弱虫でちっばけな自分はその化け物と戦うのが怖い。

自らを犠牲にしてまで叶えるべき願いが、そんな少年には導き出せなかったのだ。

——けど、俺は——

—————

朝の通学風景なんて、カケルにとって見慣れた物でしかなかった。気だるそうに学生鞆を肩に掛け、ずるずると歩いていく男子学生。何気ない会話を交わしつつ、仲良く肩を並べる女子学生二人。公道でイチヤついてんじゃねーぞ、と絡みたくなる様なラブラブカップル。

エトセトラ、エトセトラ……。

その日の天気や気温で通学模様が変わる事もあるが、それもほんの些細な変化である。

カケルもその風景の一部であり、傍から見ればただの冴えない中学生にしか見えないだろう。

変わり映えしない日常が当然そこに在る、

筈だった。

「おはよう！ カケル君！」

元気な挨拶が、後ろから掛けられる。

この声はまどかなーと予想。にこやかな笑顔を作り、背後のまどかに振り返った直後。

「おはようまど……うわあ」

自分の笑顔が凍り付くのを、カケルは感じた。同時に、不快感と嫌悪感を足して二で割った感じの声も上げてしまふ。

「その反応、さっきのさやかより酷いね」

時間がフリーズしていたカケルの頭に、直接声が響く。

——もう語るまでも無いその声の主は、まどかの肩にしっかりと乗っかっていた。

外見は……白ウサギって言えばいいのかなあ。他に特徴……あ、ガラスみたいに無機質な赤い目があります。数は二つね。第三の目とかあったら、見た者全てが恐怖をその身に覚えるだろう。

「……おはようキュウベえ」

「明らかに声のトーンが落ちてるよ、カケル」

全く訳が分からないよ、と付け足すキュウベえ。こっちとしては、朝から貴方に出遭う事の方が訳が分からないんですけど。

<カケル君、何か失礼な事考えてない？>

<！？ まどかの声が聴こえる……何で？>

<何かキュウベえの力らしいよ。だよー最初は吃驚するよねー？>

<？ さやか居たのか。ゴメン、気付かなかった>

「普通にまどかの隣に存在してたわよ!!」

テレパシーで会話すれば良いものを……わざわざ声に出して絶叫するさやか。

学生達（通行人Aとかも含まれます）が、さやかの方を白い目で見て、通り過ぎて行く。

……何かデジャビュ。妙に見覚えがある光景だ。あー似たようなのがCDショップであつたねえ。

<さやかはもうちょい、周りの目を気にするべきだと思うぞ>

<誰の所為だと思ってる!?!>

<え、さやかの所為だろ?>

<むきやあああああああ!!>

<さやかちゃんが壊れた!?!>

これはヤバイ、謝らないと——そう思った時には手遅れで。

わなわなと怒りで体を震わせるさやかから、神速の鉄拳が振り下ろされた。

鳩尾ヒット! クリティカル!

鈍い打撃音が、通学路にて響き渡ることになるうとは……誰が予想出来ただろうか。

――

「カケル君！ 机にぐったりしない。授業はもう始まってるんですよー」

カケルが授業中、一限目だけで先生に五回以上名指しされたのは、完全な余談である。

何でって？ 勿論、お腹の痛みですよ。

第8話 日常すぎて怖い（後書き）

かなりギャグ成分が濃いですね。

ただ、次回からは少しずつシリアス度が増えていく予定です…予定です。

では、また次回。

第9話 バッグの中身は（前書き）

第10話です。何事にも飽き性な作者がここまで続けられているのは、この作品を読んでくれている皆さんのおかげです。本当にありがとうございます。

>内容については……いつも通りです

>サブタイトルについては、作中で明らかになります。今回でえ、付け方が徐々に適当になってきてる？…はいスイマセン。

それでは、どうぞ。

第9話 バッグの中身は

コツコツと足音が響く。

昼休み。教室を覗けば良い意味での喧騒に包まれているのに、この場所は違う。

（寂れてるなー……）

告白場所としては最適なのだろうが、一番テンションの上がる昼休みで、ここまでの静かさを保つ場所というのも珍しかろう。

不良生徒が隠れて煙草を吸う場所を挙げるならココ！ と云う不名誉な称号が付けられているのはきつと気の所為。見滝原にそんな生徒は居ないと思いたい。

カケルはそんな、人気の無さ過ぎる屋上へと続く階段を上っていた。

理由は至極単純。魔法少女の件でまどかとさやかに呼び出されたからである。

（つうか、折角の昼休みなんだし待たせちゃ悪いよな。昼飯も早く食いたいし）

カサリ、と片手に持つビニール袋が音を立てる。中身はコンビニ食と菓子パン。

たまには自分で弁当を作るのもまた一興……が。時と場合によってはコレに頼らざるを得ない事情があるのだ。例えば、弁当の中身を買ったと忘れたいかね。

まあそれかもしれない。昨日は色々有りすぎて暇が無かったから！ と今朝一人でブツブツ言っていたのはトッブシークレット。

今朝は殴られたりと色々有った（有りすぎた）が、やっと一息つけるだろう。

微かに気分を高揚させ、カケルは歩を速めようとした。

こつこつこつこつ。

「……？」

そこで、自分のものではない誰かの足音が上から響く。

（まどか達が下りてきたのか？）

そう思い、カケルが顔を上げると。

「……」

少し、ほんの少しだけ顔を歪ませたほむらの姿が目に入った。

「……！」

カケルの存在に気付いたのか、慌てて横を通り抜けていく彼女。

「あ、おい……」

一瞬遅れながらも、ほむらに声を掛ける。

結局、彼女が振り向く事は無かった……けれど。

最後まで彼女が、無表情に戻らず悲しそうな顔をしていたのをカケルは見逃さなかった。

「ファーストフード店！！ それは若者が集う——憩いの場です」

店内を大音量で流れる変なテロップがやけに五月蠅い。

ファーストフード店の所を強調しすぎだろーとカケルは思う。

こんな傍迷惑なキャッチフレーズが売りの店なんて、早々に潰れる。絶対に。

だが人の入り様を見るに、繁盛……しているのだろう。客層としては中高生が大半だが、全体を統計してみれば親子連れやOLもちらほらと見える。

つまり。

「またこの店は、老若男女問わず支持を集めています！」

再び流れるテロップが全てを語ってくれた。分からない。何故この店が儲かるのか。

味も中々、店員の接客態度も良し、加えて言えば店の雰囲気もそれなりだ。この三つだけを見れば、納得出来る……のに。

（憩いの場って割りに五月蠅いのが玉にキズだよな）

どうでも良い事を考えつつ、頬杖を付きながらボーッとしていると、コン、とカップが置かれる。

「それじゃあ魔法少女体験コー……じゃなくて魔女退治見学ツアー第一弾を始めましょうか。準備はいい？」

……マミさんが途中、こちらをチラリと見たのは……うん、心遣い痛み入ります。

ちよっぴり傷心しかけのカケルの隣で、さやかが「準備とは言えないかもしれないけど」と何かを取り出す。

布に覆われた筒状のそれは、やけに重量がありそうだった。

ばさり、と布を剥ぎ取ると……独特の光沢を持つ金属バットがさやかの手に。

「何もないよりかマシかと思って」

高々と金属バットを掲げ、満足そうに微笑むさやか。

受付の店員とか、周りのお客さんとか。特に近くに座るまどかは、目を点にしてさやかを凝視している。

「危険すぎるぜ……。まあ俺も持つてきましたけど」

かくいうカケルも、ゴソゴソとバッグを探り始め……。手にひやりとした感触。あった。

「……いやいやいや！！ アンタ他人の事言えないよねえ！？」

「？ ……カケル君！？」

まず始めに、隣に座るさやかが中身に気付く。二番目に、まどかが。マミさんは前に座っているの、死角なのか見えていない。

カケルがバッグから取り出すと、その場に居た全員が硬直した。

「ナ、ナイフ……？」

「いやあ、家にはこれ位しか無かった……アレ？ 皆さんフリー

ズしてませんか？」

「……はっ！ 危ない危ない……じゃなくて！ カケルのそれ……銃刀法違反じゃない？」

「……」

刃渡りゆうに二十センチ以上。……。

「はは、キュウベえがフライドポテト食べてるゝ可愛いなあ」

「何気に現実逃避するなっ！ しかも凄い棒読み！？」

「ま、まあそついう覚悟で居てくれるのは助かるわ……。か、鹿目さんは何か持ってきた？」

「うえ！？ わ、私ですか？ えーっと取り敢えず衣装だけでも考えてきました」

話題を急に振られたのが意外なのか、あたふたとバッグの中身を探り出すまどか。

テーブルの真ん中に、A4ノートが広げられる。

そこには、まどかが魔法少女に変身した時（仮定）の衣装、そして武器が描かれていた。筆圧からしてシャーペンっぽい。

「ふふっ……意気込みとしては充分ね」

「はははっ……こりゃ参った、アンタには負けるわ。く、くくっ……」

「……うつ」

ぷしゅーと顔から蒸気を出すまどか……羞恥によってか真っ赤に染まっている。

「いやいやまどか、上手いと思うぜ？ 将来はデザイナーだな」

「カケル君……ありがとう」

それでもカケルは「良く頑張ったな」という笑みをまどかに向けていた。

その所為でまどかの赤みが更に増したのも露知らず。

そんな微笑ましい光景で、他二人は温かく見守っていると同時に「いちやいちやしすぎ」と非難を浴びせていたのを、カケルとまどかは気付かなかった。

第9話 バッグの中身は（後書き）

リア充爆発（ry

10話目も無事終了。終わった。やっと終わったよ。

冒頭部分でのほむらは、2話目の時のあれです。原作を知らない人には描写不足が多々あったと思います。すいません。

次はやっと戦闘シーン…か？ 相変わらずの駄文っぷりをその目に焼きつけてください。

では、また次回。

第10話（前） （前書き）

更新遅れてすいません…。

内容については、ストーリー準拠、戦闘シーンは次から。流し読み
OK。

それでは、どうぞ。

第10話（前）

暗闇の中で、光っては消え、光っては消え……マミさんの手の中にあるソウルジェムは点滅を繰り返している。

ファーストフード店で軽い食事を済ませた後、カケル達は昨日の「改装中」の場所に侵入もとい魔女の痕跡を追っていた。

「これが昨日の魔女が残していた魔力の痕跡」

一定の間隔による点滅……魔力の周波数、とえばいいのか。魔女によって、ソウルジェムが示す反応はまちまち。強力な魔力ほどより一層の輝きを以って持ち主に危険を知らせる……らしい。以上、マミさんによる解説から抜粋。

「基本的に魔女探しは足頼みよ。こうしてソウルジェムが捉える魔女の足跡を辿って行ってくてワケ」

「意外と地味ですね……」

振り回せば危険性大の金属バットを担ぎながら、さやかが言う。カケルのナイフは……諸事情諸々大有りなので、出していない。……出せない。

「そう言わないの。……それに、一つの方法しか無いんだったら、その方法で手を尽くして精一杯頑張れば良い……そう思わない？」

「……全くの正論です。あたしが悪う御座いました」

ポロリと零した一言に、ここまでの正論を返されると思わなかつ

たのだろう。さやかは手を挙げて「降参」のポーズを取り、おまけに謝罪を加えた。

さやかとキュウベえを除く全員が、その様子に笑いを隠せない。ほんの少し和やかになったその場を、カケル達は離れる事にした。

――――――――――

街路樹の立ち並ぶ道を抜け、代わりに大量の街灯が並ぶ歩道。

そこから見える街並みは茜色に染まっていた。

カケル達はどれ程歩いただろう？ 相変わらず、ソウルジェムが発する光に変化は無い。

「ねえママさん。魔女の居そうな場所、せめて目星ぐらいは付けられないの？」

「魔女の呪いの影響で多いのは交通事故や傷害事件……だから、大きな道路や喧嘩が起きそうな歓楽街を優先的にチェックしないと後は自殺に向いてそんな人気の無い場所」

ソウルジェムの微々たる反応をも見逃さない様、それを持つ手に視線を落しながら淡々と語るママさん。すらすらと発言するその姿は、正にベテランという感じだ。

「それから、病院とかに取り憑くと最悪ね」

「っ……病院？」

さやかはその言葉に反応。

「ええ。ただでさえ弱っている人達から生命力が吸い上げられる

から……目も当てられなくなるわ」

その言葉が示す意味を、さやかはどう取ったのか。険しい表情を浮かべ、遠くの街並みを見つめている。

さやかは何を思い浮かべているのかは、ご想像にお任せしよう。
ヒント？ 恋する乙女の表情ですな。

……同時に、茶化しの言葉を掛けられないくらいには、悲しげなのだが。

「……これは」

そこで、マミさんが立ち止まる。カケルが不審に思い、そちらを見やると。

その手にあるソウルジェムが、爛々と輝いていた。
今までの反応の比ではない。ただハッキリと強い魔力の反応があるのを示していて――

「かなり強い魔力の波動だね。近いかも」

真剣みを帯びた声音で、マミさんはそう告げた。

――

ソウルジェムを頼りに、魔女の足跡を辿った結果。カケル達は、パツと見小綺麗なビルの前に来ていた。

が、入り口には「KEEP OUT」という黄色いテープが張り巡らされているので、既に廃ビルなのは言うまでもない

人気は皆無、一般的に誰も寄り付かなさそうな場所。成る程、確かに「自殺に向いてそんな場所」であろう。

「！？ あれは……！」

さやかが、上を指差す。

「……は？」

啞然とした声が自分の口から漏れた。

上。それも屋上。そこから身を投げ出し、こちら側に落ちて来る女性の姿が視界に映ったからだ。このままいけば間違いなく、彼女は死ぬ――！

予想外の事態。迅速に対応したのは、マミさんだった。

そのまま女性の落下地点に向かって勢い良く跳躍、そのまま魔法少女へと衣装を変え、手をかざす。

すると、糸の様な黄色い光の奔流が、空中に編まれた。それは女性の体を包んだ後、落下の威力を相殺し――……。

結果、横たわったままフワリと女性は地面に着地した、手際の良さと状況判断の速さに思わず舌を巻いてしまう。マミさんには拍手でも送りたい気分ではあったが、女性の方が心配だ。カケル達が急いで駆け寄ると。

「……魔女の口付け。やっぱりね」

マミさんが、女性の首を見ながらぼつりと呟く。女性の首筋には、赤い模様がくつきりと浮かんでいた。

「こ、この人は……？」

「大丈夫、気を失ってるだけ……行くわよ！」

――
廃ビルに相應しい埃っぽい空気が、屋内を満たしている。ひび割れたガラス窓や破損した壁から夕日が差し込み、雰囲気は「いかにも」という感じだ。

……最近は立ち入り禁止の場所に入る事に、縁でもあるんだろうか。KEEP OUTが目に入る度そう思えてしまう……気にしたら、そこで負けなんだよね。

「未来君もそろそろ、ナイフ取り出しておいて。何が起きるか分からないから」

警戒する様に、注意深く辺りを見回すマミさん。許可が下りたので、カケルはバッグからナイフを取り出す……純色の刃が陽の光に反射して綺麗……おっと危ない。

「カケル君、目が怖い……」

「……」

まどかの一言で、視線が一気に集まったのは気の所為だよ。あのマミさんでさえ、わざわざ後ろを向いて、こっちを見たのは気ノ所為だよ。

感情って案外、表に出るんですね。そう語ったのは誰だったか。……誰だったつけ。

「はあ……何か、アンタが居ると空気が締まらないわね」

「褒めても何も出ないぜ……うん、反省はしてるよ？ 不可抗力
だけ」

「褒めてないんだけどね……はあ」

一回の会話で、二回も溜息をつかれると流石にへこむ。ツッコミ
役も呆れたのか、元気がない。

「くすつ……見てて飽きないわね、何というか……。けど」

表情を緩ませかけたマミさん。だがそれは直ぐに引き締められる。
そのままおもむるに、さやかバットとカケルのナイフに触れた。
光がそれらを覆い――

「うわわっ……！」

「うお！？」

――さやかとカケル、両方が驚愕する。

変化は劇的だった。さやかの無骨な金属バットは、装飾過多とも
言える、マジカルカラフルな物に変わり。カケルのナイフは、刃渡
り五十センチ程の短剣に姿を変えた。刀身は太く、両刃。元となっ
たナイフの面影は一切無く、俗に言う「グラディウス」に似ている
かもしれない。

「気休めだけど、これで身を守る程度の役には立つわ。絶対に私
の傍を離れないでね」

魔女退治見学ツアーが、ここに幕開けを開始した。

第10話(前) (後書き)

続きは(後)で。

更新の遅れについては、本当に申し訳ない。
次は戦闘シーンが入ります。…ふう。

それでは、次回。

第10話（後） 薔薇園の魔女（前書き）

さて、駄文な作者が更に駄文になる戦闘シーンの時間だよ…せん、とう？

…酷い、酷すぎるよ…そんなレベルです。

描き方については、コメントとかで指摘してくれるとそれはとっても嬉しいなっ（以下略

それでは、どうぞ。

第10話（後） 薔薇園の魔女

カケルにとって二度目となる魔女の結界は、やっぱりどこかズレていた。

一見すれば、独特の感性を持つ建築家が、内部をデザインしたかに思っビルの中。

だが、目を凝らせば凝らすほどに普通の建築物とは一線を画している訳で。

剥き出しのコンクリートに描かれた、噛み合うことの無い模様。有つてはならない高さに設置された、小さな備え付けの窓。壁に飾られた、理解不能の絵画等……。

ほんの些細なものなのだ。意識しなければ気付かない様な、ちょっとした違和感。初めて迷い込んだあの結界に比べれば、まだマシな中身。……前よりも、使い魔の数が増えている件を除けば。

リンリンリンリンリン！！

「迎えの挨拶にしちゃあ、過激すぎませんか？」

目に入るのは、大量の使い魔。

耳に届くのは、けたたましいベルの音……いや、ベルというよりも、火災警報装置の様な甲高い音が鳴り響いていた。どうやら使い魔がこの騒音を放っているらしい。

「……ハンドベルによる合奏は、もうちょいお静かに……ふっ！」

呼気と共に、まどかのすぐ傍まで迫った、蝶の羽を持つ使い魔に

カケルは袈裟斬りを繰り返す。いとも簡単に使い魔は霧散し――

「あ、ありがとうカケル君！」

「気を付けるよ？ まどかは武器を持ってないからな」

――倒した総数は、これで七匹目。単調な動きで頭突きをかまして来る使い魔は、カケルにとって格好の獲物だった。

軌道さえ読めてしまえば、後は斬るだけでいい――短剣こと「グラディウス」が、妙に手に馴染む。

「何かカケルが輝いてる！？ まどかを守るのはあたしだ！」

「未来君、中々やるわね。……私も頑張らないと」

「……カケル、やっぱり君は逸材だよ」

カケルの健闘ぶりに、三者三様の声が上がる。

が、絶賛雑魚狩り中のカケルには聞こえなかったそうなの。

――

「頑張つて！ もうすぐ結界の最深部だ！」

マミさんを先頭に進んでいく、魔女退治見学ツアー一行は、着実に魔女へと近付きつつあった。

途中、使い魔はカケル達の進路を幾度と無く遮ったものの、その度に迎撃されている。

そんな使い魔達にも、与えられた選択肢が三択。

撃ち抜かれるか斬られるか殴られるか。……どれを選んででもマシな結果にならないので、潔く消えてもらうしかないのだが。

「……見つけた」

使い魔達による襲撃が収まってきた頃、マミさんはそう呟いた。

「？ 何をですか？」

訳が分からず、カケルが訊き返す。するとマミさんは腕を掲げ、マスケット銃を召喚した。

銃口は、前方へ。突きつけられた先に居たのは、以前にも見た白モジャの使い魔——まるで何かを守るように、何十匹もの群れを成している。

ダン、と銃声が響いた時には、一掃される白モジャ君達。……合掌。

「倒しておいてどうかとは思っけど、南無……ってうわ!？」

カケルが手を合わせた瞬間、不意に景色が切り替わった。ドアが迫っては開き、迫っては開き。三、四度不思議な出来事が繰り返される。

着いたのは広い空間。その中央に座するは――。

「あれが、魔女……?」

目の前の生物が魔女なのだという直感。

その体格も、圧迫感も、見に纏う異様な空気も、全てが使い魔の比ではない。

一目瞭然の差に、使い魔の存在が霞んで見えた。

「グロい……」

外見に対してだろう、さやかが素直な感想を口にした。

朱色やオレンジ色に染まった、ドロドロとした胴体。そこから生える用途不明な巨大な羽。

グロテスクな外見と裏腹に、足元には美しい薔薇が咲いて――
…撤回、不気味だ。美しいとは思えない。濁り切った赤色の花卉が
「美」という概念を見事に削ぎ落とす。

「あ、あんなのと戦うんですか？」

「大丈夫」

にこり、と。まどかの不安に、気負いなど感じさせない、絶対の
笑みをマミさんは返して。

「負けるもんですか」

ドン！ さやかのバットを地面に突き立てた。

地面から色彩豊かな光が生み出され、カケル、まどか、さやか＋
一匹を包む。

「これで安全、と。……下がってて！」

微笑の余韻とその言葉を残して、彼女は魔女へと向かって行く。
まるで死地に赴く戦士みたいだな、とカケルは思う。縁起でもな
い、けれどあながち外れてもない例え。

……そんなこんなで、負けたらバッドエンド直行の死闘が始まっ

た。

羽虫を殺すような気軽さで、彼女は足元の使い魔を踏み潰す。ぷちっ。

直後、魔女はその醜い巨体を震わせて、彼女を見た。

……やっとなつてくれたらしい。今、魔女との差は殆ど無い。この距離でなら十分な威力を以って銃弾を打ち込める。

彼女——マミは無言のままマスコット銃を召喚した。

対して魔女は、自ら座っていた椅子らしき物を、あるうことがブッ投げ——。

その軌道上には当然、マミが居る。直撃コースであるその場を回避し、マスコット銃でそれを破壊。初撃が防がれたと悟ったや否や、魔女は文字通り飛んでいた。

成る程、背中に付いていた羽にはそんな意味があったのか、とマミは益体のない思いを抱きつつ、再びマスコット銃を召喚、そして撃つ。

一発、また一発。マミの体に振動が走る度、銃は火を噴いて、銃弾が魔女を貫かんと迫る。

だが、銃弾は壁に穴を作るだけで——当たらない。魔女は鈍重そうな姿に似合わず、凶弾を紙一重で避けていた。

(なら……)

長期戦に持ち込んでも、こちらが不利になるだけ。攻撃手段を変えるべく、マミは攻撃の手を止めた。魔力によって構成される武器の具現化には、少々ラグが生じるのが常。基本武器となるマスコット銃には無くとも、取っておきの切り札となれば……時間を要するのは必然である。

同時に、隙が出来る事も必然だった。

「きゃっ……!!？」

具現化に集中していた為、注意が疎かになっていたのか。いつの間にか足元の使い魔が、一つの蔓となつてマミの体に巻きつく。そのまま空中へと放り出された。

マミは胃の飛び出る様な浮遊感を感じながら、マスケット銃を具現化して魔女へと打ち込む。

全弾、ハズレ。魔女の足元に、結果、弾痕が残るだけで。

「無駄な抵抗だ」魔女はそう嘲笑うかのように、マミを壁へと叩きつけた。

「うぐっ……」

「マミさんっ!!」

背中に走る痛みで朦朧とする意識の中、声が聞こえた。それは確かめるまでもない、後輩達の声。

動けないマミに魔女が止めを刺そうと、無慈悲に迫る。

あと数秒。自分が何もしなければ、待ち受けるのは死だ。

「大丈夫」

けれど、絶体絶命の状況で、片目を瞑ってマミは笑う。

その笑顔は、引きつったものではない。

その笑顔は、勝利を確信したものだ。

何故、笑えるのか？

——だって、もう仕掛けてあるんだから。

「未来の後輩に、あんまり格好悪いとこ見せられないものね！」

……勝利への布石は、既に整っていた。だが魔女は気付かない。喰いつかんとばかりに、マミとの距離を大きく縮める魔女の動きがピタリと止むのを見て、マミは不適に口角を吊り上げる。

「残念。こんなところで死ぬもんですか」

魔女の後ろ。薔薇の咲き乱れる地面から、無数の光の糸が舞い踊っていた。濁った赤色の花弁が、はらはらと散っている。魔女が慌ててそちらに駆け寄り、憤怒を滲ませた様子でマミに体を向けるが、遅い。

先程女性を助けたモノより、倍以上の長さで数を併せ持つ糸が、魔女を拘束する。

「惜しかったわね」

胸元のリボンを解く。全ては止めの一撃を放つ為に。

「ティロ・フィナーレ！」

リボンは巨大な銃砲へと姿を変え——はい、終了。

勝利の轟音が響き、戦いは決着した。

第10話（後） 薔薇園の魔女（後書き）

オワタ。文章的にもまだ マギ的にも。

……さて、まどか マギカ、最終回を見させてもらいました。
救いようの無い、救いようのある…バッドともハッピーとも取れる
終末。

…私の書く作品は、結局自己満足でご都合主義で…拙くて。
こつちも色んな意味で救いようが無いけど…ちゃんと完結させたい
と思います。
見てくださった方々、本当にありがとうございました。

それでは、次回。

次回からはマジご都合主義。鬱フラグをへし折ってやる…この駄
作で！

第11話 魔女退治見学ツアー、第一回目終了（前書き）

GW突入&テスト期間終了キター！！

その間にモチベの低下、スランプ、そして度重なる不慮の事故。色々あったけど、投稿します。今だスランプ継続中

誤字脱字の指摘、毎度ながらお願いします。感想も…お願いします、そうほざく書き手に、良作を書けるはずもなく、生み出す作品はきつと駄文で出来ていた。

それでは、どうぞ。

4月30日、誤字修正

第11話 魔女退治見学ツアー、第一回目終了

今日も今日とてやられ役。そう言っても過言では無い程に、あつけなく魔女は灰燼と化した。

……そう。過剰攻撃とも取れる圧倒的火力をその身に受けて、あつけなく。

「か、勝ったの……？」

「凄いつ……」

百人居れば百人とも、それも「凄え！」という感嘆の反応をテンプレートに示すまどかとさやか。

カケルもそうしたかったが——何分、自分はチキンな野郎である。現在進行形で優雅にティーを飲んでいる彼女を見ると、へなへなと足から力が抜けていった。

結論。マミさんは無事。戦闘の最中、壁に叩きつけられたりと危なげな場面はあったけれど。

安堵から来る虚脱感がカケルの全身に駆け回る頃、風景が一変する。

「……あーそついや廃ビルの中だったっけ？」

結界の印象が強烈すぎた所為か。元の場所は廃ビルなんだよな、と今更ながらに認識した。

「三人とも、これを見てくれる？」

変身を解除し、十歩にも満たない場所で身を屈めながら、マミさんが手招き。

「何ですか？」

呼ばれた三人が興奮冷めやらぬ様子で（一人除く）そちらへ向かう。

マミさんは、ソウルジエムではない何かをその手に携えていた。それはソウルジエムとは対極の、黒く黒く――何もかもが濁りきった先にあるような暗色をしていて、

（……あるえー？ 立ち方おかしくね？）

コレ何？ というよりも「どうなってんのコレ」という疑問が頭をもたげた。

球体のように膨らんだ部分と、針みたいに鋭い先端。前者ではなく、後者を支えに立っている謎の物体。

「重力とか色んな法則性を無視した結果がこれだよ」みたいな？

「これはグリーンフシード。魔女の卵よ」

「た、卵……？」

「運が良ければ、時々魔女が持ち歩いてる事があるの」

カケルを他所に、話はどんどん進んでいく。

これは名称グリーンフシード、ラッキーデイの時にゲット可能の代物、と。

……重要なところを何故誰も突っ込まない。俺か、俺がおかしいのか。

「大丈夫！ その状態では安全だよ。寧ろ役に立つ貴重なものだ」
「貴重って……食えたりす「はいちよつと黙りましょうねー」

ドスッ。

今朝と寸分変わらない、人の急所ともいう鳩尾にさやかな鉄拳制裁。
お前は喋るな……分かったか？ と言葉ではなく肉体言語で最後
通告が渡された。

コクコクと頷くカケル。イエスかハイで答えろっていう理不尽極
まりない質問って怖い。

「……私のソウルジェム、タベよりちよつと色が濁ってるでしょ
？」

首振り人形みたいに、しきりに頷くカケルをやや憐憫の混じった
目で見、マミさんは説明に戻る。

「けど、ほら」

グリーンフィードをソウルジェムに近づけると、黒い靄がボウッ、
グリーンフィードに吸い込まれて消える。

靄を取り除かれたソウルジェムは、以前よりも輝きに磨きがかか
っていた。

「あ、綺麗になった」

「ね？ これで消耗した私の魔力は元通り……で」

……で？

不自然なところで途切れる会話。

言葉は紡がれることなく、そのまま暗闇にグリーンシードを投げ捨てるマミさん。勿体無い、と呟きかけたが最後通告の件を思い出し、発言を控える。

が、嫌でもカケルは声を上げることになった。

「……あと一度ぐらいは使える筈よ。貴方にあげるわ、曉美 ほむらさん」

「あ、」とそこまで言われて漸く気付く。

いつまで経っても響かないグリーンシードの落下音。それイコール地面に落ちていないのを物語っている。加え、決定打となるマミさんの一言。

一連の事実が示すのは、暗闇の先に、受け取った人物が居るという事だ。

夕日が、その人物を影の中から切り取る。

長い黒髪に、デフォルメな無表情。階段の時とは違う、感情の籠っていない瞳と顔。

この要素が揃った上での女子生徒を、曉美 ほむら以外カケルは知らなかった。

「それとも、人と分け合っじゃ不服かしら」

「貴方の獲物よ。貴方だけの物にすればいい」

それが彼女なりの意思表示であり返答。投げられたグリーンシードに、ほむらは相応の投げ返し方をして。

「そう……それが貴方の答えね」

それを受け取ったマミさんの問いに、答えもせず去っていくほむら。

「くうっ！ 感じ悪い奴！」

足音も消え去った頃、さやかは拳を震わせ、怒り心頭といった様子。

「仲良く出来れば良いのに……」

「お互いそう思えば、ね」

相手の事情、こちらの事情。それが違えば、意見の衝突も必ず出てくる。

俺はほむらの事情を知らないし、こちらを知る由が無い。
話し合えば分かり合えるのか、それとも……。

魔女退治見学ツアー、第一回目終了。

あの後、自殺しかけた女性の様子を見に行つて……率直に言おう。

混乱している女性を、母性溢れる笑顔と言葉で包むマミさん——
貴女ホントに中三ですか？

第11話 魔女退治見学ツアー、第一回目終了（後書き）

ひよおい、シナリオが進まんぞい。

マミさん殆ど原作の台詞しか言っていない気が。もうちょい頑張るよ、私。

それでは、次回。

番外編 とある病室の一角で（前書き）

今回はさやかメイン。

語りが中二なのは仕様。作者がそつだから。

5 / 8 修正

それでは、どうぞ。

番外編 とある病室の一角で

心臓が、破裂しそうに波打つ。
どくん、どくん、どくん、と。——いつもの三倍速じゃないでしようか、そう錯覚する程に。

「ふう……」

高鳴る鼓動を抑える為、一息。
そのままスーハースーハー。深呼吸を何度も繰り返す内、アルコールの匂いが鼻につくのを少女は感じた。

……ここは病院。独特の雰囲気が漂う、健康人には微塵も縁の無い場所である。

そんな場所で——ほんの少し体重と緊張を預けるようにして、壁にもたれ掛かる少女が一人。

彼女は、風邪を引いたやら薬を貰いにやら、病人よろしく目的で訪れた訳ではない。

寧ろ「病院って自分の為に来訪する場所じゃないよね」、そう自負するまでに少女は生粋の元気っ子であり。

（落ち着けあたし。もう一度、大きく息を吸って）

幼馴染のお見舞い一つに、ちょっとした前準備が要るくらい——
普通の女の子だった。

「……すっくはあ」

ぐっと拳を握りながら再度深呼吸。

頑張れあたし、負けるなあたし。主に緊張に。小さな、それでい

て大きな決意を固め、少女は目的の病室に赴く。

かつん、と少女の足音が病室に木霊して。

ゆらゆらとそよ風に揺れるカーテン。その隙間から覗く、外の景色でも見ていたのだろうか。

足音に気付いた少年は視線を少女へと移し――

「やあ」

と、笑顔で挨拶。

共に添えられた笑顔に、頬が熱くなるのを感じながらも。

少女は何とか、微笑み返す事が出来た。

――

「はい、これ」

目の前の彼こと、上條 恭介のお見舞い時には、”ある物”を持って行くのが当たり前。

今日もその例外ではない。少女はバッグの中からしまい込んでいた品――CDを取り出し、恭介に手渡す。

「わあ……いつもありがとう。さやかはレアなCDを見つける天才だね」

少女が選曲したCD盤は、どうやら彼のお気に召したらしい。嬉しそくに笑う恭介。

「そんな、運が良いだけだよ」

名前を呼ばれた少女……さやかは、大袈裟に手を振って謙遜する。出費元はカケルの財布からなんだけどねー、と心中でちゃっかり

付け加えておいて、だが。

「この人の演奏はとても凄いいんだ……さやかも聴いてみる？」

「えっ？」

カチャカチャと右手だけでCDのセットをし終えた恭介は、さやかの心情を知ってか知らずか——そんな事を口にした。彼はそのまま、二対となるイヤホンのうち一本をさやかに差し出す。

「い、いいのかな……」

頬を赤らめた後、受け取ったイヤホンをまじまじと見つめ、それを装着するさやか。

「本当はスピーカーで聴かせたいんだけど……病院だしね」

（っ！？）

まず間違いなく、恭介は無自覚な奴なのだと悟りつつ。

それでも、やおらと顔を近づける彼に対し、さやかは再び自分の心臓がヒートアップし始めるのを止められなかった。

カチリ。恭介の手によって、電源が入られる。

少女が動揺を隠し切れぬままでも、セットされたCDは音楽を奏でだし——美しい旋律を、病室内に居る二人に届けた。

（……やっぱ思い出すなあ）

その旋律を聴いて、少女が記憶の底から真っ先に思い起こしたモ

ノは、懐かしい、幼き日の情景。

あの日、あの時、あの場所で。

それなりの人数を揃えた観客が見守る、演奏会。さやかはそこで、恭介のヴァイオリンによる演奏を聴き入っていたのだ。

普段は温和な表情で佇む彼の、真剣なその表情。

さやかはその豹変ぶりを、笑わなかった。出来る訳がなかった。逆に、「カッコいい」とさえ思えたその姿は、今でも鮮明に覚えている――。

――

淡い記憶の再生を遮ったのは、他ならぬ彼の嗚咽だった。

顔を上げると――抑え切れない感情の奔流を、大粒の涙で表す恭介。

……無意識になのか自発的になのかは分からないが、彼の左手は震えていて。

かつて、天才ヴァイオリニストが頼りにしていた唯一無二の左手は、開くことも握ることも叶わない状態に陥った。ましてや、演奏することなど以ての外。

その事実には、さやかは下を向いて、目を逸らすコトしか出来ない。

（……もしも。私が契約する時は……その時は……）

とある病室、その一角での出来事。
少女の願いは、果たして。

番外編 とある病室の一角で（後書き）

…オリ主出てません。

まあ、さやかによる心情の一端とってください。…女の子って難しいアル。

それではノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1091s/>

魔法少女まどか マギカ ~IF物語~ とあるオリ主（男）によるチート物語

2011年5月22日06時23分発行